

協同（協働）、協調がどのような自律性を導くのか

2018-11-17

工藤 節子

1. はじめに

『ピアラーニング入門』（池田・舘岡 2007）

協働、協同、共同、きょうどう、コラボレーション、コーポレーションという言葉があるが統一されていない。認知科学、情報科学、まちづくり、経営学、コミュニケーション学、学校教育、外国語教育における協働を振り返り、日本語教育における協働の概念で、対等、対話、創造の重要性を打ち立てた。⇒ピアリーディング（舘岡）、ピアレスポンス（作文の推敲活動にピアを取り入れる 池田）

私にとっての協働

なぜピアを使うかといえば、ピアのほうが教師が主導の授業より、学習効果が高いと考えるからだ。責任をもたせることで学びも大きく、より自律性を導くことができる。

例「台日社区交流（台日交流）」⇒協働を通した多元的な学習、自律学習能力（テーマを掘り下げる、深める、人と協力して目標をやりとげる）が身につく、1+1 が 3 以上の効果をもつ（ただ単に知識量が増えたということではなく質的に変化している）。

自律とは、他に支配されず自分で自分を抑えて行動すること（『集英社 国語辞典』

（自分を抑える、とは自分の気まますを抑え、自分を律すること）

⇒受身ではなく、自身の判断で必要なコミュニケーション、必要な学習ができること、自分に合った人生を選択できること

しかし、教室でのグループワークで課題を感じることは多い。（例「一人だけがやって、他の人が遊んでいる」、「役割が固定し、特定の学生だけが活動するグループ」「これは混乱以外のなにものでもない」（⇒「教師が構造を決めるのをおろそかにしている」）

前回の許先生（銘伝大学）の読解の授業でのドラフト会議（「学思達」の教育実践（<https://sites.google.com/a/dlsh.tc.edu.tw/flipall/home/fen-zu-fa-yu-ji-fen-fa>）を取り入れたグループワーク（能力差のある学生のグループで予習を徹底しグループで責任をもって理解を深めることによって、クラス全体に学習する空気を作り出していくという授業実践）はおもしろそうだが、実行する勇気がない。

⇒なかなか効果的なグループワークが実現できていないというのが現状。

そこで、協働の概念をもう一度見直し、教室活動デザインを少し変えてみようと思った。今は再デザインをして授業を始めたところで、結果はまだわからない。学期末に報告できるかな？と考えている。

2. 協同学習とは何か 『協同学習の技法』安永監修 2009)

2-1 協同とは何か

① 意図的な計画

教師は意図的な学習活動を準備する／意図的な構造

② 共に活動する

メンバーは同じような貢献

③ 意味ある学習

科目の知識を増やし、理解を深める

学習の責任を教師から学生に移すとクラスが活性化する。

教師と学生が共に認め、共有された授業目標が達成できないと教育的意味はない。

2-2 協同 (Cooperative) と協調 Collaborative) の違い

協同学習 (Cooperative Learning)

科目の専門家であり、権威者である教師が、グループ学習の課題を作成し、学生に割り当て、時間を管理し、学生の学びを監督する。グループがうまく機能しているかどうかを確かめる。

【前提】

全てのものに「正しい答え」がある、「もっとも望ましい解答」がある。教師は科目の専門であり、正しい答えを知っている。

【目標】 仲良く協力して共に学び、お互いに支えあいながら解答を捜し求めること

協調学習 (Collaborative Learning)

中心的な考えは社会的構成主義

「学生と教師が知識の創造に向けて共に学びあう。成長するというのが前提」

×「知識が現実社会のどこかに存在し、人の努力によって発見されるのを待っている」

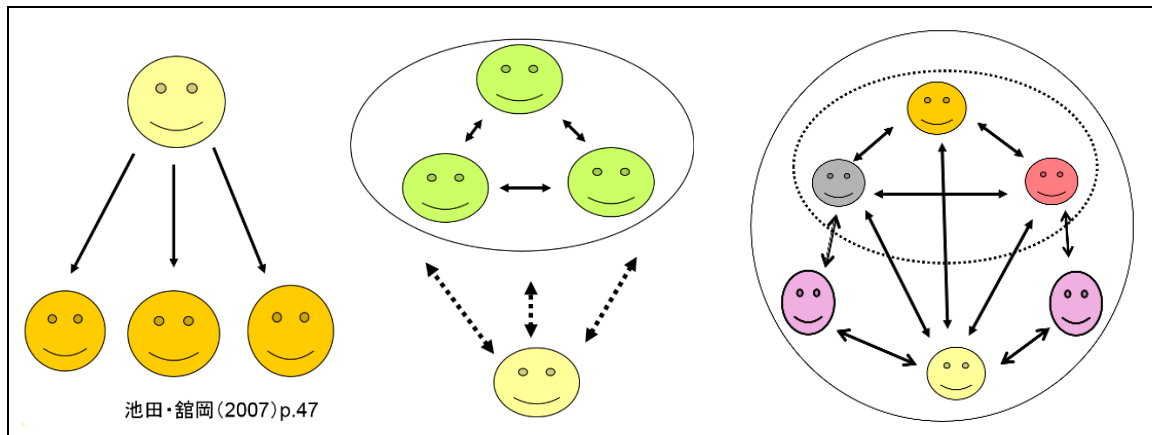
○「知識は物事に精通している仲間同士の共通認識によって作り出される。

グループ学習を監督・指導することは教師の義務ではなく、学生と一緒に、新しい知識を探求する共同体のメンバー

【目標】 意見をはっきり述べられる自律的で思慮深い人を育てる。

(同じようなことが山内祐平研究室のブログにも書かれていた。

⇒<https://fukutake.iii.u-tokyo.ac.jp/ylab/2015/06/cooperative-learning.html>)



2-3 『学習の輪』 ジョンソン, D.W. ジョンソン, R.T.

望ましい協同学習の5つの基本原則

1. 肯定的相互依存

個人の成功はグループの成功と結びついている→学生はグループ目標を達成するためにお互いに助け合う。目標だけを共同的にするより報酬も協同的にメンバー全員に得られるようにする。

2. 促進的相互交流

学生はお互いに積極的に助け合うことが求められる。メンバーは学習資源を共有し学ぶためお互いの努力を認め、励ましあう。

3. 個人と集団の責任

グループはその目的達成に責任がある。メンバーはグループ活動に貢献する責任がある。個人は個別にも評価される。グループがうまくいくためには個人の責任とチームとしての報酬が保証されなければならない。

4. 集団作業とスキルの発達

学生は専門的内容を学ぶことを求められる。同時にグループのメンバーとしてうまく活動するために、必要とされる対人関係スキルや小集団スキル（チームワーク）も獲得することが求められる。これらのスキルも意図的に正しく教えられなければならない。

5. グループの改善手続き

学生はグループの成果を評価することを学ぶ必要がある。メンバーのどの行為がグループに役立ち、どの行為が役立たないのかを明らかにし、どの行為を続け、どの行為を変えるべきかを明確にする必要がある。

3. 授業における協同学習のデザイン

適切な学習課題を組み立てる⇒学生が積極的に遂行できるように手順を構造化すること（目標を達成するためのステップを構造化する。何をどう構造化するかは科目によって異なる）

3-1 教師の仕事

ステップ1 指導目標を明確に

学業に関する目標と協同技能の目標をたてる。多くの教師の犯しがちな過ちは、学業面の目標だけを具体化し、協同の訓練に必要な目標をおろそかにする点である。

ステップ2 グループの大きさを決める

取り組んで間もない教師にとってもっともよいのは、3人組かペアから始めることである。6人が上限。

ステップ3 生徒をグループ（異なるタイプの学生から成る）に振り分ける

ステップ4 教室内の配置を考える

円形に座るのがベスト 生徒があらゆる教材を確認でき、お互いに見て、声をはりあげることがなく意見をかわし、心地よい雰囲気の中でアイデアを交換できることが必要である。

ステップ5 相互依存関係を促す教材を工夫する

教材を相互依存的に仕組む いっしょに取り組まなければならない教材を与える。グループ同士を対抗させることによって相互依存を仕組む、トーナメント方式によるグループ間競争

ステップ6 役割を割りあてて相互依存関係を促す

メンバーに責任を負わせる

まとめ役／チェック係／矯正係／関連付け・推敲係／調査・連結係／記録係／激励係

ステップ7 学習課題を説明する

学生が何をなすべきかをはっきりとわかるような課題を構成する

ステップ8 目標面での相互協力関係を作り出す

浮き沈みを共にする学習場面におかれていることを理解してもらう

例； メンバー全員が70点以上とったら、ボーナス点を与える

ステップ9 個人の責任を求める体制

全ての仲間が学習にかかわるようにする。自分がわかることを他の学生に教える。皆がグループで助け合って勉強することを示して個人の責任を求めているという体制を作り出す。

ステップ10 グループ間の協力を促す

あるグループが課題をやり遂げたら、他のグループの手助けにまわるよう求める。

ステップ11 達成の基準を説明する

絶対評価であること。どこまで達成すれば合格と認められるかを示す。成績のつけかたは、グループに不利なものであってはならない。教師は各グループ及びメンバーの達成度にたえず、注意を払うだけではなく、クラス全体が到達できる基準を設定するなどの水準を設けておく。

ステップ12 望ましい行動を具体的に示す

全員の参加を促す 他のメンバーが言ったことを正確に聞く

ステップ13 生徒の行動を観察・点検する

生徒の適切な行動を記録するためのきちんとした観察表をできる限り使う。

授業の回数ごとに用意する。(⇒自発的に答える学生、あててから答える学生、あてても答えられない学生など)

4. 授業「総合二C」に協同学習を組み込む ⇒学習方法を学ぶ／自分はやればできるという自信

4-1 グループの問題

学期初めに学生に自由にグループをつくらせた（授業中の練習、応用会話作成と発表）

▲レベル差が大きい（助け合うという状況が生まれにくい。できる子はできる、できない子はできないまま）

▲4人ぐらいと言ったが、5人のグループが2つ、3人のグループが1つ⇒応用会話を作るときも5人では多すぎるため、3人、2人にわかれ、最終的に2人から4人のグループ（人数的にもアンバランス）

▲一部の学生がやって他の学生は遊んでいる。練習が圧倒的に足りない。

4-2 協同を組み込む

①中間試験に一部組み込んでみた

会話は一人ではできないので、中間試験の課題を2人（4人グループは二つに分かれる）、3人のグループで行う際、グループの助け合いの点数を5点にした。個人の満点は45点。

⇒自分の行為がグループの5点にも反映されるので、個人だけで点数をつけている時より比較的がんばったという印象。

②中間試験後に正式に導入

教師の率直な印象（今までの練習不足の問題）を述べ、新たな提案をした。

●グループ（あまりいい状況ではないが今学期はこのまま使う。問題があれば来学期変える。）

●グループのメンバーに責任を持たせ、役割を割り振り、グループ点数を設置することで相互協力関係を作り出す

●能力に関係なく個人ができることを責任をもってやることでグループ全員が向上するような構造を考える

a. 予習を徹底（単語の意味を調べる、理解チェック問題を作ってくる、授業の最初の5分で確認後、授業開始）グループの点数⇒質問をする5点+紙を提出5点

b. 小テスト実施（各課ごとに）27点満点でグループ全員が22点以上ならボーナス点3点

c. グループ内の役割を決めて責任、練習を促す（リーダー、監督、コーチ、専門家）

d. 応用会話作成と発表

↓

③ 授業中の強化

・小テストの内容を具体的に説明し、練習すれば難しくないことを強調、練習のし方も紹介。

・練習中、自分の言いたいことばが見つからないとき、教師に聞いてもいいが専門家にも相談するよう指示し、コーチ役の学生へも練習のさせ方を教え、役割意識を強化。

・来週は応用会話の発表なので、パフォーマンスの質をあげるためにグループで練習する部分を強化し、質の高いパフォーマンスを行ったグループから学ぶように指示する。

④ 相互評価を実施し、役割ごとにどのような仕事ができたかを評価させ必要なら改善をさせる。